

聖書：使徒7：1～16

説教題：神の約束を信じて

日時：2013年9月8日

使徒の働き7章、サンヘドリンにおけるステパノの説教が記されているところです。ステパノは「あの7人」の一人として素晴らしい働きをしていましたが、反対者たちが現れて議論を吹っ掛けて来ました。批判は2点です。6章13節：「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。」この訴えを起こしたのはリベルテンの会堂に属する人たちでした。この人たちは奴隷として外国に連れて行かれた後に自由にされた人々とその子孫で、外国生活に満足せず、聖都エルサレムに戻って来た人たちです。そういう意味で人一倍宗教に熱心な人たちだったと言えます。その彼らにとって、エルサレム神殿とモーセ律法は宝の中の宝でした。自分たち選民の誇りでした。そんな彼らにとってステパノの言動は、これに逆らう言葉のように聞こえたのです。そこで他のユダヤ人を扇動して、ステパノをさばくため、ユダヤの最高議会へ引っ張って行ったのです。

このステパノの説教は使徒の働きの中で最も長い説教となっています。まずイスラエルの歴史が回顧されています。話を見て行きますと、ステパノは主に4つの時代を取りあげていることが分かります。すなわちアブラハム、ヨセフ、モーセ、そしてダビデおよびソロモンの時代です。分量を考えて今日はアブラハムとヨセフの時代についてステパノが語った部分を見て行きたいと思います。

大祭司に「その通りか」と問われて、ステパノは語り始めます。2～3節：「そこでステパノは言った。『兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、「あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け」と言われました。』」アブラハムはイスラエル民族の祖ですから、彼に立ち返って話を始めることはふさわしいと言えます。皆が大いに関心を持って聞き入ったことでしょう。しかしステパノはさっそくあることを強調しています。それは神はアブラハムがまだメソポタミヤにいた時に現れたということです。ユダヤ人はエルサレム神殿を誇っていました。ここにこそ神はおられると主張しました。しかしステパノは、神はある一つの場所に拘束されるお方ではないことをまず明らかにしているのです。その後の歴史を振り返ってもそうです。神はアブラハムを次にハランへと導かれました。そして約束の地カナンへと導かれました。しかしこれでもう他の地域で活動しなくなったのではありません。9節以降で舞台はエジプトへ移っています。9～15節には「エジプト」という言葉が6回も出て来ます。そこで神はご自身の重要なみわざをなされました。今日は16節までしか見ませんが、その後も、さらに他の土地のことが触れられて行きます。

このような振り返りを通してステパノが明らかにしていることは、神をある場所に限定して考えることはできないということです。ましてや人間が造った建物に閉じ込めておくことなどできない。神は全世界で自由にご自身の働きをなさって来られたお方です。歴史の中に示されて来たこの神の大きさとつながりの中で、彼らは自分たちが信じる神について、また神殿に

ついて、考え直さなければならないのです。

ではこの神に対して、彼らが父と呼ぶアブラハムはどのように歩んだでしょうか。3節以降のステパノの言葉から知ることは、アブラハムはただ「信仰によって」歩んだということです。アブラハムは神から「あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け」と言われた時に、その出て行く先がどんな所か、知らないのに出て行きました。その土地をまだ見ていないのに、ただ神の言葉に信頼して出発しました。そしてハランに住み、父の死後、ユダヤ人がこの時住んでいたこの地にやって来ました。しかしそこで足の踏み場となるだけの土地さえも彼には与えられませんでした。普通の人間の感覚から言ったら、「神様、これでは約束が違うではありませんか！私のものである土地はさっぱり見えません」と言ってもおかしくなかったでしょう。そんな彼に神はさらに約束されました。5節にある通り、この地をあなたとあなたの子孫に財産として与える、ということです。まだ一片の土地さえ与えられていないのに、この地全部をあなたに与えると神は言われる。またまだ子どもを与えられておらず、アブラハムとサラはどんどん高齢になってその体は死んでいると言われる状態なのに、神はなおも子孫を与えるとされる。一体誰がこんな約束を信じて歩むことなどできるのでしょうか。しかしアブラハムはただ「信仰によって」神の前に歩んだのです。ここにおいてもステパノを訴えているユダヤ人とアブラハムの間には大きな違いのあることが示されているのではないのでしょうか。ユダヤ人たちは神殿また律法という目に見えるものに自分たちの信頼を置き、これらにより頼んで生活していました。しかしアブラハムは目に見えるものにより頼むのではなく、それにはよらない信仰による歩みをしていたのです。

アブラハムの信仰について二つのことを述べたいと思います。一つは神の恵みにより頼む信仰です。私たちはアブラハム物語を振り返る時、よく彼はこんな神の約束を信じたことができたなあ、と思います。確かに驚くべき信仰です。しかしこの信仰が功德となってアブラハムは祝福を受けたわけではありません。彼も私たちと同じ罪人でした。多くの失敗を犯し、自分の罪に打ちのめされることも多くありました。こんな自分はいつ神に捨てられてもおかしくないと思っただけでしょう。ところが神はこんな自分になお関わり、私の神となってくださる。そんな導きの中で彼は、自分は自分の立派さによって救われるような者ではないこと、もしそうして頂けるならそれはただ神の一方的な恵みによること、自分の望みはただ神の恵みにあることを告白して従って行きました。アブラハムに告げられた言葉の中には6節のように厳しい内容も含まれていました。しかし7節にあるように、その苦役からやがて神が救い出してくださることも合わせて語られていました。たとえ自分の頭に理解できなくても、恵みをもって必ず救い出してくださる神に望みを置く信仰がアブラハムの歩みでした。

またもう一つの彼の信仰の特徴は、やがての天における完全な成就を期待し、待ち望む信仰ということです。アブラハムはカナンに連れて来られた時、足の踏み場となる一片の土地さえも手にしませんでした。しかしアブラハムは不平不満を漏らしませんでした。それは真の祝福は天で与えられることを見ていたからです。ヘブル書11章13節、16節：「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。・

事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。」 地上で与えられるものは最終的な祝福ではない。仮に何かを与えられても、それはやがて天で与えられるまことの祝福を指し示す模型のようなものでしかない。そうとらえてアブラハムは地上のことに心がへばりついてしまうのではなく、やがての天における神の約束の完全な成就を見つめ続けたのです。16 節でヤコブがエジプトに葬られることをよしとせず、まだ他国人の手にあった約束の地に葬られることを指示したのも、地上的な繁栄ではなく、天の故郷こそを待ち望み続けた信仰の現れです。

8 節には割礼の契約のことが述べられています。これは神が永遠にアブラハムとその子孫の神となつてくださり、共にいてくださるという約束のしるしです。神がご自身の名にかけて、ご自身が恵み深くあることを誓ってくださったしるしです。アブラハムは感謝してこのしるしを頂きます。これも彼が恵み深い神に信頼し続けたしるしです。彼は恵みの神に信頼して、割礼を自分の子イサクに施し、さらにこの契約のしるしは子孫にも受け継がれて行ったのです。

この父祖たちの信仰の歩みに照らして、当時のユダヤ人たちはどうだったでしょうか。時を経て、彼らには神殿が与えられ、また律法が与えられていました。どちらも神の恵みです。しかし彼らは父祖たちのように、神の御言葉に聞き、神の恵みにより頼む歩みではなく、目に見えるものにしがみつき、それらの内に自分たちの救いを見出そうとする生活をしていました。これは目に見えるものとのつながりによって自分の救いを確かなものにしようとする自己義認の原理に立つあり方であり、父祖たちとは全く反対のあり方だったのです。

最後に短く見たいことは、信仰によって歩んだ父祖たちを神はどのように導かれたかということです。一言で言えば、神はその者を必ず守り導いてくださるということです。4 節、5 節にも神の約束が真実であることが示されています。9 節以降のヨセフ物語もそうです。ヨセフは兄弟たちによって売り飛ばされ、エジプトでどん底状態に落とされます。しかし神はそんなヨセフといつも共におられました。あらゆる患難からか彼を救い出してくださいました。山あり谷ありの人生を経て、彼は後にエジプト全土の大臣にまで導かれます。こうして神はヤコブの家を守り、また彼を通して全世界を飢饉から救ってくださいました。ここに明らかにされていることは、神はご自分の恵みの約束を必ず守ってくださいるということです。どんなにひどい状況に置かれても、そこでも神は私と共にいてくださると知ることは、私たちにとって大きな励ましです。理不尽なことしかないように思われる中でも、神は最も賢くきよい摂理の御手を伸ばして下さる。だから神に信頼する者の歩みは決して虚しくない。

以上のステパノの言葉の光に照らして私たちはどうでしょうか。私たちは当時のユダヤ人のようにエルサレム神殿を誇ったり、モーセ律法を誇ることはないかもしれません。しかし似たような危険はあり得るのではないのでしょうか。たとえばこの主が与えて下さった素敵な会堂に来て礼拝をささげているから私は大丈夫。この礼拝堂が与えられているということに満足し、そこに信頼を置く。あるいは良い伝統を持つ教会の教会員であるから大丈夫。その原簿に私の名が載っている限り、私が救われることは間違いない。あるいは歴史的に有名な宗教改革者、中でもあのカルヴァンの流れに属し、ウェストミンスター信仰基準や正しい教理を信じる立場に立つ教会に属しているから自分は救われる。あるいは夕拝を行なう教会が少なくなっている

中でそれを保ち続け、朝も夕も自分は出席しているから私の救いは間違いない。あるいは私は杉並のランチクラブは週ごとにメニューが違って、毎回美味しく頂けることは素晴らしい祝福だと思っていますが、このようなランチクラブの交わり、愛餐の交わりに毎週あずかって心も体も満たされているから、私は大丈夫・・・。今述べて来たことはいずれも祝福であり、そのことで神に感謝し、神に一層高く目を上げるなら良いことですが、いつしかこういった外的な事柄により頼み、そこに満足を覚え、そこに信頼を置くなら、先のユダヤ人たちと何も変わらないことになります。次回見ますが、それは本質的に偶像礼拝です。神の御心から離れて、好き勝手な宗教生活をしていることです。割礼というしるしを頂いていながら、51 節でステパノが言うように、「心と耳とに割礼を受けていない人たち」ということにもなりかねません。私たちはそのことを振り返り、ステパノの言葉に聞いて、改めて信仰の父祖たちの姿に倣いたいと思います。父祖たちが恵み深い神の御言葉に聞き、キリストによる救いに信頼したように、私たちもキリストに信頼し、この方であって神が導いてくださる祝福に信仰によって歩みたいと思います。そしてこの世でどんな祝福を受けようとも、神が天に備えていて下さるまことの完全な祝福に目を高く上げ、天の故郷を目指す信仰の歩みを続けてまいりたいと思います。